2009 年マアジ

単位：数量、1000 トン、価格、円/kg

年	数量 漁獲	養殖	産地	輸入	東京 生鮮	東京 冷凍	東京 塩干	消費支出 生(グラム)	在庫	加工 塩干	価格 産地	輸入	東京 生鮮	東京 冷凍	東京 塩干	消費支出 生(円)	ムロアジ 漁獲	ムロアジ 産地
20	172	1.7	95.8	41.6	19.3	0.4	10.7	1,690	37.1	46.7	220	163	520	406	457	1,649	34.7	20
21	166	1.6	101.3	43.8	19.4	0.4	11.2	1,572	39.3	53.3	154	143	488	368	419	1,472	27.4	17
%	96	94	106	105	100	102	105	93	106	114	70	88	94	91	92	89	79	85

漁獲量と資源

２１年の漁獲量は 16.6 万トンで、ほぼ前年をやや下回り、平成 11 年以降の平均 20-25 万トン台を本年も引続きかなり下回る低水準であった。

本年は主力の東シナ海がほぼ前年並みであったが、近年漁獲が安定していた山陰沿岸の水揚げがやや低調であったため、前年並みの漁獲にとどまった。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1973～1976 年の 25～33 万トンから 1977～1980 年の 13～18 万トンに減少した後、増加傾向を示し、1993～1998 年には、51～56 万トンの高い水準を維持した。1999 年以降はそれよりやや低く、2001 年は 28 万トンに減少したが、その後増加して、2004 年は 52 万トンであった。2005 年以降は減少に転じたが、2008 年はやや回復して 42 万トンだった。再生産成功率は、1990～2000 年まで、変動しながら減少傾向を示したが、2001 年に急増した。その後は再び減少傾向を示し、2005～2007 年はかなり低い値となったが、2008 年には再び増加した。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある、といわれている。

また太平洋系群の資源量は 1986 年以降顕著に増大し、1990 年代半ばは 150 千トンから 160 千トンと高位水準であったが、1996 年の 162 千トンを頂点に減少した。2000 年と 2001 年にはやや増加したが、2002 年以降は 100 千トン前後を推移し、2008 年の資源量は 83 千トンとなっている。2006・2007 年の加入尾数は約 7 億尾と少なかった。2008 年は約 11 億尾と推定された。なお資源を維持するための方策としては漁獲圧の削減が期待されている。

以上のように何れも資源水準は中位であるが減少傾向にある。

ムロアジ類

大中型まき網のマルアジの資源密度指数は増減を繰り返しながらも長期的には減少傾向で推移しており、近年では低い水準にある。マルアジを除くムロアジ類の資源密度指数は 1990 年代前半までは増減を繰り返しながら推移してきたが、1990 年代後半に減少し、2000 年代前半にかけて低い水準となった。その後、近年は増加傾向にあり、2008 年はやや高い値となった。マルアジおよびムロアジ類（マルアジ除く）の資源密度指数の相乗平均値は過去約 30 年間でみると低い水準にあり、最近 5 年間（2004～2008 年）では増加傾向にある、といわれている。（近年ＭＡＸ：Ｈ２年 10.9 万トン）

産地水揚量と価格（４２港）

海域別水揚量

海域	20年	21年	前年比
東シナ海	54.6	52.9	97
山陰	35.1	31.9	91
豊後水道			
九州東岸	2.8	4.6	166
薩南	2.6	2.1	79
太平洋		2.6	
その他日本海			

月別漁獲量

月	20年	21年	前年比
1	6.2	5.8	93
2	5.0	5.4	108
3	8.5	9.4	110
4	11.5	8.9	77
5	13.0	10.8	83
6	9.7	9.5	99
7	11.6	7.6	65
8	7.0	6.6	94
9	7.9	7.3	93
10	6.6	9.8	147
11	5.3	9.4	176
12	3.4	8.2	239
計	95.8	101.3	106

月別価格推移

月	20年	21年	前年比
1	167	196	117
2	220	223	101
3	169	158	93
4	227	198	87
5	258	230	89
6	290	246	85
7	244	306	125
8	236	239	101
9	176	210	119
10	171	123	72
11	176	126	72
12	243	131	54
計	220	154	70

21 年のマアジの水揚量は､10.1 万トンで前年(9.6 万トン)をやや上回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（４～６月）の割にはやや低調な漁況が続き、水揚げも期待したほど伸びず、しかも、秋口から冬場にかけても山場のない漁で水揚げも低迷し、結果年間水揚げは前年をやや下回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（４～６月）の本年も昨年をやや下回る水揚げに終始し、秋・冬漁で若干の盛り上がりをみせたものの、結果的には、昨年を更に下回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域で前年をやや下回ったが、東海海域で漁獲がやや伸びた。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく本年も周年豆アジ（０～１歳魚）主体で推移し、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、154 円で下半期の集中水揚げもあり引続き前年（220 円）を下回った。

輸　入

21 年のアジの輸入は、4.4 万トンで５～７万トンの近年の範囲を依然やや下回る水準であり、前年(4.2 万トン)をやや上回った。

本年は、オランダ 1.5 万トン(前年: 1.7 万トン)、ノルウェー0.9 万トン（前年：0.4 万トン、アイルランド 0.3 万トン（前年 0.2 万トン）で主力のオランダは減少したものの全体的にはヨーロッパ諸国からの輸入水準は依然高いのが特徴。また韓国は 0.6 万トンで前年（0.8 トン）を下回り、台湾は 0.1 万トン前年（0.2 万トン）と減少し、中国が 0.2 万トンと増加している。

価格は、143 円で価格の高騰も収まり前年(163 円)をやや下回った。

在　庫　量

本年の在庫量は、3.9 万トンと引続き前年（3.7 万トン）を若干上回った。

これは、輸入の増加と国内生産が相殺され、末端消費がやや落ちていることを反映したものである。

消費地入荷量と価格

21 年の東京消費地の入荷量は、生 1.9 万トン（前年 1.9 万トン）、冷 0.4 千トン（前年 0.4 千トン）であった。塩干物は 1.1 万トンで前年（１.１万トン）を何れも前年並みであった。

本年の 1 世帯あたりの消費支出は本年も数量、金額とも前年をやや下回った。

価格は、生 488 円（前年 520 円）、冷 368 円（前年 406 円）、塩干 419 円（前年 457 円）で、生鮮、冷凍・塩干開き何れも単価の下落がみられた。